第一回

平成二十七年度

宇都宮短期大学附属中学校

入学試験問題

国語

注意

1 「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
2 試験時間は四〇分間です。
3 問題数は大きな問題が三問で、問題文は一ページから七ページまであります。
4 答えはすべて解答用紙に記入してください。
5 「始め」の合図があったら、すぐに受験番号と氏名を解答用紙に記入してください。
6 試験中に質問があれば、手をあげて先生に聞いてください。
7 「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおいてください。

〔一〕

次の、言葉に関するそれぞれの問いに答えなさい。

問い1 次の――線部の漢字の読み方と同じものを、下の**ア**～**エ**から選んで、記号で答えなさい。

(1) 許可 ［**ア** 共通　**イ** 去来　**ウ** 辺境　**エ** 漁村］

(2) 説得 ［**ア** 接続　**イ** 雪原　**ウ** 絶交　**エ** 折半］

(3) 読点 ［**ア** 湯治　**イ** 大豆　**ウ** 頭脳　**エ** 登山］

問い2 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

(1) たて穴式**ジュウキョ**を見学する。

(2) アメリカ行きの便が**ケッコウ**した。

(3) 羊の**ム**れを追う。

(4) ヘビやトカゲの**類**い。

(5) 全国大会に**導**く。

問い3 次の**ア**、**イ**のことわざが、同じ意味になるように、それぞれの□に入る言葉をひらがなで答えなさい。

ア □も木から落ちる

イ □の川流れ

問い4 次の熟語の構成をあとの**ア**～**エ**から選んで、記号で答えなさい。

(1) 省略　(2) 値段

ア 音＋音　**イ** 訓＋訓　**ウ** 音＋訓　**エ** 訓＋音

問い5 次の――線部の敬語の種類をあとの**ア**～**ウ**から選んで、記号で答えなさい。

(1) わたしの代わりに兄が参る予定です。

(2) お探しの本はこちらにございます。

ア そんけい語　**イ** けんじょう語　**ウ** ていねい語

〔二〕

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小説『博士の愛した数式』を書いたのは、四年前のことですが、それを書くきっかけを与えてくれたのが藤原正彦先生でした。ある日テレビをつけていたら、NHK教育テレビの番組で、世界中の天才数学者の人生を藤原先生が語るという番組をやっていました。

先生の見た目は、ご存じの方もあるかと思いますけれど、何というかあまりロマンティックな感じではないと言いましょうか、髪の毛がもやもやっとしていたりします。しかし、数学者ですから当然頭の中身はもやもやしておらず、非常に論理的で、あいまいさを許さない、凡人には想像もつかない優れた能力をお持ちなのです。私はそれまで、そういう思考能力の優れた人、まして数学のような(注1)無機質なものを研究している人は、(注2)情緒的なものにたいして冷たいんじゃないか、という先入観を持って見ていました。

（　A　）、たまたまその時はウイリアム・ハミルトンという十九世紀のアイルランド人の数学者についての回だったのですが、その番組の中で先生は、ほとんど目に涙を浮かべんばかりの表情でハミルトンの悲恋について語っていたのです。「このハミルトンという数学者は非常に早熟な才能豊かな子どもで、美しい風景を前にして気分が高揚(注3)してくると、この美しさを英語ではとても表現できないとラテン語で即興の詩を作るような少年だったといいます。彼は十九歳のときに大金持ちの娘のキャサリンに恋をするんですが、そのキャサリンのお父さんに反対されて泣く泣く引き裂かれます。それからハミルトンは学問の方面に精進(注4)しまして、四元数という、数学の世界においては偉大なある発見をします。散歩の途中にそのアイデアを思い付いたハミルトンは、感動のあまり、橋の途中にその四元数の基本式をナイフで刻んだというんです。そのように数学の世界で偉大な業績を残しながら、彼はなお昔別れたキャサリンの面影が忘れられずに、四十五歳になったとき、いまではすっかり朽ち果ててしまったキャサリンのかつての家を訪れて、二十六年前に彼女が立っていたその床に接吻(注5)をしたんです」というふうに、先生がお話しになっていたのです。

（　B　）、藤原先生の口から「接吻」というセンチメンタル(注6)な言葉が出てくることが、意外でした。そこで私は、数学者に対して自分は①間違ったイメージを抱いていたことに気づいたのです。

先生はまた、「数学が表す真理は、何事にも影響されない。物理的な影響も受けないし、永遠に真理でありつづける。百年経っても一億年経っても、人間が滅んだ後も間違いなく真実でありつづける。そしてそれは②とうてい人間の手では作り出せないものだ。だから美しいのだ」「たとえば、山の天辺に美しい花が咲いている。その花に手を触れたい、ただそれだけの願いを持って、険しい山道を一歩一歩上るように研究しているんです」とおっしゃっていました。

数学者たちは決して、無機質な対象を、無感動に研究しているのではなかったのです。そこにはとても人間味豊かな感情が存在していたのです。そのことを、藤原先生の人間的な魅力といいますか、情緒の豊かさを通して教えられました。

それともう一つ意外だったのは、数学者たちがとても④ (1) だということです。

（　C　）、「三角形の内角の和は一八〇度である。それは人間がそういうふうにさせたからでもないし、人間の心が感じるからでもない。人間が生まれる前から、ずうっと世界はそういうふうに作られているんだ。ということは、人間よりももっと偉大な何者か、サムシング・グレイトによって、三角形の内角の和はどんなに小さな三角形も巨大な三角形も、すべて一八〇度になった。だから数学者は、偉大な何者かが世界のあちらこちらに隠したそういう秘密を、洞窟から宝石を掘り返すようにして見つけ出す、それが仕事だ」というふうに考えているんです。（　D　）そういう目に見えない何か偉大なものに対する謙虚(注7)な気持ち、ひざまずく心を持って、世界の有り様を追及しているのです。

よくこういうことが言われると思います。「 (2) 」と。つまり、フェルマーの定理は、一九九四年にイギリスのアンドリュー・ワイルズという数学者によって証明されたが、ワイルズが証明できなくてもいずれ誰か他の天才が証明できた。しかし、ピカソの絵はピカソにしか描けない、ということでしょうか。

このように、数学者を含めた科学者の人たちが、ある特別な謙虚さをもって自分の仕事に当たっていることが、大変魅力的な点でした。

以上のような出会いにより、私の数学に対するイメージは根底からくつがえされました。数学と耳にするだけで、自分には無関係を決めつけていたのに、そこに予想もしなかった不思議、驚きがかくれていたのです。すぐに私は、

これは小説の題材になると直感しました。数の世界が、才能豊かな数学者たちが頭を垂れるほどに美しいものであるなら、その美しさを［(3)］で表現してみたい。というところから作品が生まれてきたわけです。

（小川洋子「物語の役割」から）

（注1）無機質なもの＝生命の感じられないもの。温かみのないもの。
（注2）情緒的なもの＝喜怒哀楽などの心の動き。またはそれを誘い起こすような雰囲気。
（注3）高揚＝気分が高まり強くなること。
（注4）精進＝その事に打ちこんで努力を続けること。
（注5）接吻＝キス。
（注6）センチメンタル＝弱々しい感情に走りやすく情にもろいこと。感傷的。
（注7）謙虚＝ひかえめで、すなおなこと。

問い1（　　）A～Dに入れる言葉の組み合わせとして適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア［A つまり　B たとえば　C まず　D ところが］
イ［A まず　B ところが　C つまり　D たとえば］
ウ［A ところが　B まず　C たとえば　D つまり］
エ［A たとえば　B つまり　C ところが　D まず］

問い2 ①間違ったイメージとはどのようなものですか。解答らんの「～というイメージ」につながるように、本文中から書きぬきなさい。

問い3 ②それがさしている五字以上の言葉を本文中から探し、書きぬきなさい。（、や。などの記号も字数に数える。）

問い4 ③とうてい人間の手では作り出せないものとありますが、その例えとして何をあげていますか。本文中の言葉を使って十四字で答えなさい。

問い5 ④もう一つ意外だったとありますが、これより前に挙げられている「意外だった」こととは、どのようなことですか。それを説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から八字で書きぬきなさい。

数学者が、［　　］を持って研究しているということ。

問い6 ［(1)］にあてはまる言葉を、本文中から二字で書きぬきなさい。

問い7 ［　　(2)　　］にあてはまる文として適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア モーツァルトの音楽は、彼がいなければ決して生まれなかったように、相対性理論もまた、アインシュタインがいなければ決して発見されなかった
イ モーツァルトの音楽は、彼が作曲しなくても、何年後かに別の作曲家が似たような曲を発表しただろう。しかし、相対性理論はアインシュタインがいなければ決して発見されなかった

ウ　相対性理論は、アインシュタインが発見しなくても、何年後かに別の人が発見したであろうし、モーツァルトの音楽もまた、彼がいなくとも別の作曲家が、モーツァルトに似たような曲を発表したはずだ

エ　相対性理論は、アインシュタインが発見しなくても、何年後かに別の人が発見しただろう。しかし、モーツァルトの音楽は彼がいなければ決して生まれなかった

問い8 ⑤頭を垂れるとありますが、この言葉のもとになっていることわざを次から選んで、記号で答えなさい。

ア　敬えば頭を垂れるわが師かな

イ　実るほど頭を垂れる稲穂かな

ウ　さとるほど頭を垂れる仏かな

エ　寒ければ頭を垂れるすすきかな

問い9 (3) にあてはまる言葉として、最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア　科学　　イ　数式　　ウ　音楽　　エ　定理　　オ　言葉　　カ　愛

〔三〕

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

桜ヶ丘中学校サッカー部の「遼介」は自宅のリビングで母の「綾子」とくつろいでいた。そこに同じ部の「土屋」の母親から電話がかかってくる。息子が父親とけんかをして家を飛び出してしまい、まだ帰って来ないのだという。土屋は、今日の試合、自分から志願してAチームではなく、Bチームでプレーした。それは①自分が去るチームの今後を思っての行動だったはずだ。

去年の新人戦の前に、「マイホームは親父の夢だったからしかたない」と照れくさそうに話していた土屋の姿を思い出した。一度は自分の中で受け入れたはずなのに、ここへきて急に気持ちがぐらつき始めたのかもしれない。

どんな事情であれ、別の土地で暮らさなければならない、と自分が今告げられたら、激しく戸惑うにちがいない。慣れ親しんだ土地や、友人だけでなく、これまでチームで積み上げたものすべてを失ってしまう。それは自分のサッカーを、言ってみれば取り上げられるような気分かもしれない。②おそらく簡単には納得できない気がした。

――どこにいるんだろう。

そう思って連絡先を眺めていると、「もしや」と思いついた。電話の子機を握ると、「どうしたの？」と綾子が言った。

遼介はクリアーファイルのページをめくった。ファイルには、サッカー関係の書類が綴じられていた。その中から、二人が小学生の時に入っていた桜ヶ丘FC時代の連絡網を見つけだした。

「誰よ？」と綾子に聞かれたが、③遼介は無視した。

電話の子機を持って自分の部屋に移ると、その電話にかけた。呼び出し音が五回鳴ったあとで、聞き覚えのある声の主が出た。

A　「もしもし、武井ですけど」

B　「おう、遼介。どうした、こんな時間に？」昼間と同じ (1) 声が返ってきた。

C「おまえ、今なにやってる？」
D「えっ、ゲームで盛りあがってるとこだよ」
E「おい、早くしろって……」得意そうな和樹の声に別の声が重なった。
F「ゲーム？」
G「そう、サッカーのゲーム。けっこううまくてさ、ハゲのやつが」
H「ハゲとはなんだ、ハゲとは。おまえだってハゲだろ！」声がまた聞こえた。
I「馬鹿！」思わず遼介は叫んだ。
J「えっ？おまえ、今、馬鹿って言った？」和樹はなぜか［(2)］声で聞き返してきた。
K「そうなんだよ、おれたちはハゲている上に馬鹿だからさ」
L「おまえな、土屋が家に帰ってこないって、大騒ぎになってるんだぞ」
M「え、……だってこいつが、うちで一緒に夕飯食べたら、今日は帰らなくてもいいって言うからさ。それに明日、練習午後からでしょ。うちの親も、だったら泊まってけって……」
N「おいっ、頼むよ」
O「えっ、どうすりゃいい？」
P「とりあえず、土屋と替われ」
そう言った途端、「ゴオオオール」という土屋の叫び声が聞こえてきた。④遼介はたまらずため息をついた。
電話に出た土屋の声は、とつぜん現実に引きもどされたせいか、ひどく沈んでいた。いつものような覇気(注1)がなかった。
Q「家には帰らない」
説得を拒もうとする土屋に、遼介は目下(注2)の状況を伝えた。土屋の母親から自宅に電話があったこと、サッカー部の連絡網を使って土屋を捜していること、今もみんなが心配していること……。
R「おまえの気持ちは、わかる」遼介は自分の胸の内を素直に伝えようとした。
S「おれだって、できることならチームに残ってほしい」
T「なんでだよ。なんで、今なんだよ。これから、チームは面白くなるっていうのに。うちのチーム、可能性あるもんな。みんなと［(3)］。今年の夏の大会まで［(3)］」
遼介は黙ったまま、土屋の震える声を聞いていた。
U「チャンスなんだぞ、最後の年なんだぞ、もう二度とないんだぞ……」声はやがて嗚咽(注3)に変わった。
遼介は粘り強く土屋の話を聞いた。土屋は桜ヶ丘中学校サッカー部に対する思いと、ありったけの自分の不満を吐き出そうとした。土屋の気持ちが痛いほど伝わってきた。
「おれたちだって同じさ。おまえはチームの守備の要(注4)だった。それはみんなわかってる。最後まで、おまえと一緒にやりたかったよ。――でもな、もしそれが叶わないなら、敵と味方同士になったとしても、グラウンドで、また一緒にサッカーがしたい。そう思ってるよ」遼介は言うと、⑤強く唇の端を結んだ。
長い沈黙のあとで、土屋は言った。「わかったよ。――今から帰る」
「じゃあ、家にはそう連絡するぞ」
「うん、頼む」土屋は疲れた口調で答えた。
「本当にちゃんと帰れよ」受話器を置くのを待っていると、土屋の声が聞こえてきた。

「ああ、もう大丈夫だ」

その夜、土屋は無事に家に帰ったと、和樹が電話で教えてくれた。

（はらだみずき「サッカーボーイズ15歳（さい）―約束のグラウンド」から）

（注1）覇気＝進んで物事に取り組もうとする意気込（ご）み。　（注2）目下＝現在。

（注3）嗚咽＝声をつまらせて泣くこと。　（注4）要＝物事の重要な部分。

問い1 ①自分が去るチームの今後を思っての行動とありますが、「土屋」はどのように思ったのですか。それを説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から四字で書きぬきなさい。

自分がいなくても勝てるように、チームの新しい［　　］を立てて練習してほしい。

問い2 ②おそらく簡単には納得できない気がした。とありますが、その理由を説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から**ア**は一字、**イ**は七字で書きぬきなさい。

自分が「土屋」の立場だったら、父の［**ア**］の実現よりも、［**イ**］を続けることの方が大切だと思うはずだから。

問い3 ③遼介は無視した。とありますが、その理由として最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 早く電話をかけようとあせっていて、母親に返事をするどころではなかったから。

イ 名ぼから名前を探し出すことに夢中で、母親の声が全く聞こえなかったから。

ウ 自分で解決しようと思っているので、母親には今の状況を知られたくなかったから。

エ 母親に聞かれると「土屋」のいる場所を気づかれてしまい、都合が悪くなるから。

問い4 **A**～**U**の会話文の中から「土屋」が話したものを全て選んで、記号で答えなさい。

問い5 ［(1)］と［(2)］に入る言葉の組み合わせとして適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア ［(1) 呑気（のんき）そうな　(2) 悲しそうな］　**イ** ［(1) 恥（は）ずかしそうな　(2) 楽しそうな］

ウ ［(1) 呑気そうな　(2) 嬉（うれ）しそうな］　**エ** ［(1) 恥ずかしそうな　(2) 悔（くや）しそうな］

問い6 ④遼介はたまらずため息をついた。とありますが、この時の「遼介」の気持ちとして適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア ゲームに熱中している「土屋」を現実に引きもどしてしまうことを気まずく思っている

イ 早く「土屋」と話したいのに、なかなか本人と代わってくれない「和樹」にいらだっている

ウ みんなの心配をよそに、「和樹」とゲームに夢中になっている「土屋」に呆（あき）れている

エ 家出した「土屋」を自分より先に元気づけた「和樹」に嫉妬（しっと）している

問い7 ［(3)］に共通してあてはまる言葉を、本文中から十一字で書きぬきなさい。

問い8 ⑤強く唇の端を結んだ。とありますが、この時の「遼介」の気持ちとして適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 「土屋」のやり場のない怒りを受け止めてやらなかったことを反省する気持ち

イ 「土屋」と同じチームでプレーできなくなる辛さを必死にこらえようとする気持ち

ウ みんなの心配を素直に受け入れようとしない「土屋」に腹を立てる気持ち

エ あまりに自分勝手な「土屋」の考えを批判できたことに満足する気持ち